

『にごりえ』論

— 反復する「溝」のイメージ —

塚 本章 子

—

『にごりえ』というテクストを、根源において成立させているのは、反復という構造ではあるまいか。例えばテクスト全体を俯瞰してみれば、一章でお力と菊の井の酌婦たちの様子が描かれ、二章三章ではお力と結城のやりとりが描かれ、四章では源七一家が描かれるという展開が、五章六章七章と、もう一度同じように繰り返されている。また、お力は自分の生を、祖父・父の生の反復として位置付けようとする。そして、ことに注目したいのは、お力の思い出として語られる米を溝にこぼしたという記憶と、その繰り返しのように、カステラが溝に落ちていくという、溝に関わる一連の描写である。この、暗く澱んだ溝の中に、真っ白な、あるいはほのかな卵色の物体が落ちていくという色彩の鮮やかさは、読む者の脳裏に鮮烈な印象を与えるものである。

そして次にあげるように、テクスト全体に溝は緻密に布置されている。

あゝ馬車にのつて来る時都合が悪るいから道普請からして貰いたいね、こんな溝板のがたつく様な店先へ夫こそ人が悪くて横づけにもされないではないか、

同じ新開の町はづれに八百屋と髪結床が底合のやうな細露路、雨が降る日は傘もさゝれぬ窮屈さに、足もととは処々に溝板の落し穴あやふげなるを中にして、

大吉はがた／＼と溝板の音をさせて母さん今戻つた、お父さんも連れて来たよと門口から呼立るに、

味噌こし下げて端たのお銭を手に握つて米屋の門までは嬉しく

駆けつけたれど、帰りには寒さの身にしみても足も亀かみたれば五六軒隔てし溝板の上の水にすべり、足溜りなく転ける機会に手の物を取落して、一枚はづれし溝板のひまよりざらくと翻れ入れば、下は行水きたなき溝泥なり、

馬鹿野郎めと罵りながら袋をつかんで裏の空地へ投出せば、紙は破れて転び出る菓子、竹のあら垣打こえて溝の中にも落込むゆえ、

(傍点塚本)

お力の過去の思い出、現在生きている場所、源七一家の暮らす場所、全ては溝のイメージにつながっている。さらに『にこりえ』というタイトルは、これらの描写が重要なものであることを示唆している。

出原隆俊氏は、『にこりえ』を読み進める時、〈溝(板)〉が一つのイメージを形成していることに思いあたろう」と述べ、
「〈溝(板)〉は(略)お力の位相の一面を照らし出し、また、予期せぬ展開に巻き込まれる伏線ともなる」と指摘している。この指摘を敷衍させて考えれば、背景に広がる溝のイメージは、さらに反復という構造を持つことよって、「伏線」以上のものとして、不気味な力を帯びているのではあるまいか。

小稿では、このテクストの根源にあると思われる反復という構造の中で、この溝がイメージさせてくるものを、人物の分析とも関わ

らせながら論じてみたい。

二

このテクストのクライマックスは、お力が結城に「今夜は残らず言ひます」と言って、自らの「思ふ事」を語ろうとした場面にあった。どんなに問われても、はぐらかし続けてきたお力の物思いが、いよいよ開示されようとする場面だからである。そしてここで、反復の核となる、米を溝にこぼしてしまったというお力の記憶が語られる。

「七つの年の冬」、お力は「寒中親子三人ながら古裕衣」という極貧の中で買いにやらされた米を、「溝板の上の水にすべり」、「一枚はづれし溝板のひまよりざら」とこぼしてしまふ。「下は行水きたなき溝泥」で、もはや捨てることは不可能であった。お力は、「家の内の様子、父母の心をも知れてあるにお米は途中で落ししましたと空の味噌こしきざげて家には帰られ」なかつた。そして、「立てしばらく泣いて居た」お力に、「何うしたと問ふて呉れる人もなく、聞いたからとて買てやらうと言ふ人は猶更」なかつた。お力は、「近処に川なり池なりあらうなら私は定し身を投げて仕舞ひました」とまで思い詰めたのであった。母に連れられて家に帰っても、「母も物いはず父親も無言に、誰れ一人私をば叱る物もなく、家の内森として折々溜息の声のもれる」ばかりで、「身を切られるより

情な」い思いを噛み締めているしかなかったとお力は語る。この情景から感じさせられるのは、世間の誰一人自分を救ってくれること
のなかった孤絶感と、到底防ぎようはなかったにせよ、自分の過失
が、両親を失望させ飢えさせてしまったという痛切な自責の念であ
る。³²

そしてこの記憶は、お力の現在の生の在り方にどこか重なるもの
であった。自分の物思いを人に伝えようとする場面で語られた昔の
記憶とは、やはり、その物思いを説明しようとするための言葉では
なかったか。お力が「其頃から気が狂った」と言いながら描いてみ
せるこの情景は、かつてお力を「世間」から分かると同時にお力の
内部に入り込み、今なおお力をとらえて放さぬ何物かを象徴的に表
現するものである。それは、お力の生の原風景と呼ぶべきものに他
ならない。

結城への告白を始めた時、お力は「寧九尺二間でも極まつた良人
といふに添うて身を固めようと考へる事もござんすけれど、夫れが
私は出来ませぬ」、「持たれたら嬉しいか、添うたら本望か、夫れが
私は分りませぬ」、「持たれるは嫌なり他処ながらは慕はし」と繰
り返していた。確かにお力は、誰とも結婚しようとは思っていない
ように見える。お力と源七との関係をずっと側で見ていたであろう
お高は、「お前は気位が高いから源さんと一処にならうとは思ふま
い」と、お力が源七と結婚する意志の無かったことを見抜いている。

また、理想的な相手に見える結城にも、「奥様にしてくれろ位いひ
そんな物だに根つからお声がよりも無いは何ういふ物だ」と言わせ
ている。だが、お力が恋を知らない人間だったのではない。冒頭の
場面でお力は、明らかに源七ではない誰かに、「巻紙二尋も書いて
二枚切手の大封じ」という「お愛想」以上の長い手紙を書いている。
源七について結城が詮索する場面をみても、「夫れにお前は何うし
て逆上せた」と問われて、「大方逆上性なのでござんせう」と否定
はしていない。そして、本人を目の前にしてのお愛想は幾分かはあ
るとしても、結城にも「貴君の事も此頃は夢に見ない夜はござん
せぬ」と言っている。お力には、なぜ結婚する決心がつかないのか。
かつて、金銭を得て食べて生きていくことの前では、人は誰も他
人を救いはしないという「世間」の冷酷さを見せつけられ、そして
また人を傷付けずには生きられぬ自己の在り方を省みてしまう視線
を持つてしまったことが、今のお力の苦悩の核にある。『にこりえ』
の中では一貫して、「世間」とは他人に冷たいものとして描かれて
いる。お初の言葉のなかにも、次のように書き込まれていた。

世間一体から馬鹿にされて別物にされて、よしや春秋の彼岸が
来ればとて、隣近処に牡丹もち団子と配り歩く中を、源七が家
へは遣らぬが能い、返礼が気の毒なとて心切かは知らねど十軒
長屋の一軒は除け物

それは、より過酷になった貨幣の論理によって成り立つ近代社会

がもたらしてしまつた冷酷さであつたと言えるだろう。だとすれば、結城の前で見せた財布を取り上げ中身を無造作に他の酌婦たちにはらまくという些細な戯れ、他の酌婦たちが「力ちゃん大明神様」ともてはやすお力の「十八番」には、案内皮肉な貨幣への嘲笑が込められていたはずである。

また、お力は菊の井の二階から桃を買う太吉を見て、「あの小さな子心にもよくく憎くと思ふと見えて私の事をば鬼々といひまする、まあ其様な悪者に見えまするかとて、空を見あげてホツと息をつ」いている。お力は、太吉やその背後にいるお初に罪悪感を感じざるを得ない。そして別の場面にも、

我ゆゑ死ぬる人のありとも御愁傷さまと脇を向くつらさ他処目も養ひつらめ、さりと折ふしは悲しき事恐ろしき事胸にたまつて、泣くにも人目を恥れば二階座敷の床の間に身を投ふして忍び音の憂き涕、

とある。お力は自分の存在が、一体どこまで他人を不幸に陥れているのかということに無自覚ではいられない。

横町の闇で彷徨するお力を描いた場面に、何故かことさらに「人立おびたゞしき夫婦あらそひの軒先」と書き込まれていることから、また後に述べる源七夫婦の在り方からも伺えるように、誰かと結婚して家庭を持つということは、少なからず互いを傷付け合い、冷酷な論理に成り立っている共同体の内部に、否応なく組み込まれてし

まうことに他ならない。お力は、通常の結婚という手段では、自分を絡め取っている原風景の中から抜け出ることができないのである。

三

しかし、お力はその原風景の呪縛から飛び出そうとしていた。お力の苦悩の深さはそこにある。「行かれる物なら此まゝに唐天竺の果までも行つて仕舞たい、あゝ嫌だ嫌だ嫌だ」、「つまらぬ、くだらぬ、面白くない、情ない悲しい心細い中に、何時まで私は止められて居るのかしら、これが一生か、一生がこれか、あゝ嫌だく」という激しい煩悶に、お力は立ちつくす。しかし「唐天竺の果」など有り得ず、現実の世界以外に生きる場所はない。お力は煩悶を打ち消し、「私には以上考へたとて私の身の行き方は分らぬなれば、分らぬなりに菊の井のお力を通してゆかう」と、現実の世界にあくまでも身を置くしかないと確認する。そこで持ち出してくるのが、「仕方がない矢張り私も丸木橋をば渡らずはなるまい、父さんも踏かへして落てお仕舞なされ、祖父さんも同じ事であつたといふ」という、自分の血統の意識であつた。結城の前でも、お力は自分を「此様な浮気者」と捉え、祖父と父のことを語ろうとしている。

祖父は「四角な字をば読んだ人」で、「世に益のない反古紙をこしらへしに、版をばお上から止められたとやら、ゆるされぬとかに断食して死んだ」人であつた。父は、「三つの歳に椽から落て片足

あやしき風になりたれば人中に立まじるも嫌やとて居職に飾の金物をこしらへ」たが、「氣位たかくて人愛のなければ眞にしてくれる人もなく」、名人といつてもよいほどの腕を持ちながら、貧しいままに死んだ人であった。彼らの生は、確かに挫折の生であった。

しかし、お上を敵にまわしても自分の「反古紙」に命を張った祖父。肉体の自由を失った代わりに技芸の究極を追い求めた父。現実の世界に身を置きながらも、彼らは書くこと、造り出すことに、激しい情念を燃やして生きていたのである。それは、観念のレベルにおいて現実の世界を解体し、自らの手の中で新たな世界を紡ぎだしていく行為であった。

お力は、彼らの生の反復として自分の生を位置づける。「天下を望む大伴の黒主とは私が事」という、自らを謀反人に例えたお力の言葉は、あなたがち「茶利ばかり」でもなかった。「持たれるは嫌」というお力の言葉は、すでに、一人であることにも、他人を傷付けずには生きられぬ生の在り方にも囚われることなく、自らの手で新たな世界をつかみ取ろうとする願望に慫かれた女の自尊心でもあつたはずである。お力は祖父や父の生に、自分を絡め取る原風景の呪縛を無化する可能性を見出していた。だがその一方で、お力は挫折の予感の中で、さらに学も技術も持たぬ自分がなし得る事が無いという焦りの中で、空転していったのである。

しかしお力は、「お聞きになつても汲んで下さるか下さらぬか其

処ほどは知らねど、よし笑ひ物になつても私は貴君に笑ふて頂き度」と、理解してもらうことを懷疑しつつも結城の前で「言葉」にはなりがたい自分の思いを語ろうと試みていくのである。お力の米を溝にこぼした記憶について、岩見照代氏が、

自己同一性の解体の経験、すなわち本来的な意味の喪失の体験であり、言葉を失ってしまった体験、「米」へこぼし「がも」や何処にも到達せず、見失われてゆく体験、いわば「神」の死の体験であつたのである。

と述べているのは示唆深い指摘である。お力の自分を物語ろうとする試みとは、「言葉」にはなりがたい苦悩を他人に説明しうる新たな「言葉」の獲得によつて、自分を呪縛する原風景を対象化し手中に収めることで、その呪縛から逃れようとすることであつた。

だが語られたお力の話は、これまでにもしばしば指摘されてきたように、貧しい酌婦の身の上話として決して珍しいものには感じられない。そして語つたお力の、「紅ひの手巾かほに押当て其端を喰ひしめ」ている姿からは、お力の酌婦としての側面がことさらにクローズアップされてくる。このことについて木股知史氏は、次のように指摘する。

ハンカチを顔にあて、その端を口にくわえるという特徴あるお力の所作は、ここでは、口惜しさの表現であるが、どこか粹な型にはまっているように感じられる。そして、その粹な感じは、

型からはみでお力の情念にどこかそぐわないように思われる。ひとつの姿態や所作の背後には、ひとつの文化を想定することができる。

(略)

『にぎりえ』における、作者と作品の間の悲劇は、娼婦の常道を破って、過剰な想念を告白するお力の内部が、ともすれば人工的に見え、ハンカチをくいしめるといふ伝統的な定型の枠内にある所作が、むしろ自然に見えるという、これこそ介在している。

(傍点木股氏)

お力の姿は、「ひとつの文化」に吸収されてしまう。そしてこの木股氏の指摘を敷衍させれば、お力は「ひとつの文化」のなかで、言い換えれば、男性である祖父や父の生になぞらえるしかないような「文化」の在り方のなかで、自分がとらえられているものの複雑さを伝えうるような「言葉」を持ってなかったことになる。お力を他の酌婦とは異なる存在にしていたのは、煩悶や葛藤を繰り返しながら自己の境遇を問いつめ、「ほんに因果とでもいふものか私が身位かなしい者はあるまいと思ひます」と言ってしまうような、自意識の過剰さであった。だが、お力の「言葉」が世にありがちな酌婦の哀れな身の上話という「型」に吸収される中で、その自意識の過剰さは行き場を失い宙に浮いてしまう。そのために、お力が「言葉」にしがたい苦悩のゆえに、結城に「思ふ事」をしつこく問われなが

らもはぐらかし続けてきたことさえも、酌婦として客を引き留めるための手管だったように思われてくるのである。お力が「七つの年の冬」の記憶を語るなかに、「話しは誠の百分一」と言い添えざるを得なかったのは、自分の「言葉」が跳ね返されてしまうような、決して突き崩すことのできぬ壁を感じ取ったからである。

だがその限界の中で、お力が断片的にはあっても、あるいは象徴的にはあっても、どうかして語ろうとしていたことは、見逃してはなるまい。お力は理解してもらうことへの懷疑を示しながらも、ようやく他人に対して、「言葉」にはなりがたい苦悩を語りうる「言葉」を探し始めた。そこにはお力の新たな生の可能性があったはずである。

四

おそらく結城に語った次の日の夕方、お力は太吉を抱いて行ってカステラを買い与える。「いそ〜と帰り来る太吉郎の姿、何やらん大袋を両手に抱へて母さん母さんこれを貰つて来たと莞爾として駆け込むに」という太吉の姿が感じさせるように、お力には何か明るい幸福感があつたような気がする。菊の井の二階から桃を買う太吉を見下ろし、身を隠すようにして「空を見あげてホッと息をつ」いていた自閉し鬱屈したお力の姿はない。それは結城を泊め一夜を共にしたお力が、この世から孤絶した自分の存在をもう一度つなぎ

直し、再び人と関わっていかうとする行為だったのでなかつたらうか。しかし皮肉なことに、お力はまたもや太吉やお初を追いつけてしまうのである。

お初は、わずかでも収入を得ようと脇目もふらずに働き、源七にはかいがいしく尽くしている。そして「さあお前さん此子をもいれて遣つて下され」などと、子供を鏝に源七との破綻しかけた家庭を修復しようとしていた。源七とて自分の放蕩に後悔はしていたし、お力への未練を断ち切ろうとしていた。「あく詰らぬ夢を見たばかりにと、ぢつと身にしみて湯もつかはねば」、あるいは「あのやうな狸の忘れられぬは何の因果かと胸の中かき廻されるやうなるに、我れながら未練ものと叱りつけて」といった、源七の物憂げな様子が書き込まれている。

だが盆の日、源七は「忘れて仕舞へ諦めて仕舞へ」と思案は極めながら、去年の盆には揃ひの浴衣をこしらへて二人一処に歳前へ参詣したる事など思ふともなく胸へうかびて、「仕事に出る張も無い。もはや相手から振り返られなくなった一方的な想いであつても、家族への罪を承知していても、源七の情念はくすぶり続ける。源七は、ふと一家の家長としての現実を見失う。そんな源七をお初は「諫め立て」るが、「身動きもせず仰向ふしたる」源七にお初の思ひは通じない。この「十年つれそふて子供まで儲け」た夫婦には、貧しさを恥じ生活の維持に心を砕く妻と、ともしればそのやうな日

常性の枠からはみ出してしまふ過剰な情念を持った夫との、理解し合えずに傷付け合い、すれ違い続ける様が描き出されている。

太吉の持ち帰ったカステラは、そのような二人の断絶を一気にあらわにさせる。カステラは「馬鹿野郎めと罵」る激怒したお初によつて投げ捨てられる。心の中に押さえ込んだできた、妻としてはあらざるべき自らの「言葉」を吐き出したお初は、源七の「亭主の権」によつて家庭を崩壊させられ、「世間」からも追放されてゆくことになる。カステラは「竹のあら垣打こえて」溝の中に落ちていく。この光景は、米が溝に落ちていったお力の記憶の反復である。溝は再びむっくりとその不気味な面を上げる。源七は、ついに家族も捨てただだ一人情念の虜と化し、お初は離縁され太吉を連れて頼るあてもなく出て行かねばならない。やがてお初はお力の立場に身を置き、「言葉」には成り難い苦悩を抱くことになろう。

お力の行為は、危ういながらも微妙なところで平穩を保っていた源七一家に対してとどめを刺したのである。だがそれはお力自身に跳ね返り、お力の命を奪うことになった。思えば源七に追い出されたお初もまた、カステラを投げ捨てたことで源七を心中に向かわせ、お力にも死をもたらしてしまつたといえる。自分自身は無自覚でも、関係というしがらみと巡り巡っていく状況の中で、お初も一方的な犠牲者ではない。

お力は新たに生き始めようとしていながら、ついに救われること

はなかつた。どうにもならない加害者としてある存在、そして、愛し合うもの同士的心中とも言い難い「後袈裟」という切られ方、無理解な「世間」の人々の噂が感じさせる孤絶したお力の死。かつてと同じ原風景が、またもやお力を絡め取っている。だが、やはりそれを食い破ろうとするお力の「恨み」は消えず、人魂がお寺の山に飛ぶのである。

五

お力が語った、米を溝にこぼした「七つの年の冬」の記憶は、逃れようともがくお力をどこまでも閉じ込めていく原風景であった。カステラが溝に投げ捨てられた光景は、その変奏であり、お力をやはり閉ざし死なせてゆくのである。しかし、書くこと、あるいは造り出すことにかけて祖父と父の生に重ね合わせ、自らは自己の物語を語ろうとしたお力の行為に、そしてまた、死んでも死に切れぬお力の人魂に、そこから逃れようとする悲痛な抗いを見ることができるのであるまいか。

カステラが溝に投げ捨てられた光景はまた、お初と源七という夫婦の、理解し合えぬ断絶と傷付け合う姿を一気に表面化させもした。家族をかなぐり捨てた源七、激怒のあまりお力と源七を死なせるきっかけを作ってしまったお初の姿が浮かび上がる。お力と源七一家という関係の糸をたどって、逃れようとするお力をとらえて放さなかつ

た何物かが、今またその姿を現したのである。

溝のイメージとは、孤絶し傷付けずには生きられぬ人間存在の原風景である。そしてそれは反復することによって、一度直視してしまつた者の生をどこまでも絡め取る巨大な力となる。さらにそれは、地を這うように張り巡らされた溝の淀んだ流れそのものごとく、安定した「言葉」のシステムに成り立つ「世間」の底に広がり、人と人との関係という網目をたどりながら、どこまでも広がり続けていくものである。この反復する溝のイメージには、救済の光を見出すことのできぬ深い絶望感が漂っている。

反復の構造は、一葉の他のテクストにも見ることができ。例えば『たけくらべ』である。ここにもまた、孤絶と加害とが描かれており、またそれを猶予されていた者たちが、やがて逃れられぬものとして引き受けねばならなくなっていく変化がとらえられていると考えている。ここに描かれた子供たちは、来年の夏祭りがもはや自分たちのためのものではなく、次の世代の子供たちのものになってしまったことを思い知らねばならぬだろう。彼らは、大人たちの醜さを繰り返し、後戻りすることのない時間を生き、いつか必ず死を迎えて「日暮里の」人を焼く火の中に送られて行く。子供たちは、抗うすべもなく、何度となく繰り返されてきたであろう人の世の子供から大人への歩みを反復していくのである。背景に描かれた四季という循環する時の流れは、子供たちの誕生と成長、醜い大人の世

界への苦く哀しい旅立ち、そして死が、これまでも繰り返され、これからも永久に繰り返され続けることを暗示している。そして、かつては信如のようでなかったと言ひ切れぬ龍華寺の和尚の俗に墮ちた姿は、仏教的な救済の思想がもはや無力なものにすぎぬことを示している。¹⁾

『たけくらべ』は、明治二八年一月から「文学界」に連載されたが、途中に大きな中断があり、その間に『にぎりえ』が書かれていることは周知のことである。ここで少し、『たけくらべ』の前に書かれた二作品に目を向けてみたい。明治二七年七月から一月に発表された『やみ夜』では、「女夜叉」であると同時に「女菩薩」でもあるお蘭という女主人公が描かれている。また明治二七年一月二月に発表された『大つごもり』では、「親不孝」な息子でありながら「守り本尊」でもある石之助という人物が描かれている。彼らは「悪」なるものでありながら、この世の不合理に反発して突き崩し、世を变革しようとする激しい願望を抱いた、ある意味での救世主でもあった。だが『たけくらべ』や『にぎりえ』の世界に、より濃く漂っているのは、突き崩そうとしてもどうにもならないという無力感であり、これらのテクストの反復の構造には、結局は押し流されていくしかない目に見えぬ大きな力が表現されている。

『たけくらべ』と『にぎりえ』には、救世や变革の願望が閉ざされていく、この世の巨大な力に対する絶望が、顕在化しているの

ある。

注

(1) 出原隆俊「お力の登場―『にぎりえ』における〈借用〉について―」

『文学』一九八八年七月

(2) 猪狩友一「お力の位相―『にぎりえ』の構造・再考―」(『百合女子大学研究紀要』第二八号 一九九二年一月)にも、「泣いているお力に注がれる世間のへまなざし」は冷たく、また、家に帰ってからは沈黙が(略)彼女の心に癒しがたい傷を与えた。(略)もしこれがお力にとって初めて、自己を意識した体験であったとすれば、自己という存在によって周囲の人々が不幸になる、そういう負性を帯びたものとしてお力の、自己は発見されたのである。」という指摘がある。

(3) 戸松泉「『にぎりえ』論のために―描かれた酌婦・お力の映像―」(『相模国文』第一八号 一九九一年三月、出原隆俊「『にぎりえ』の〈彼女の〉」(『文学』一九九四年四月)に詳しく論じられた。

(4) 橋口晋作「『にぎりえ』私見」(『解釈』一九八五年一〇月)もこの点に注目し「彼女は底辺の女達の文字通りの『力ちゃん大明神様』になろうとしているのだ。」と述べているが、お力が「底辺の民衆の為に挺身し、酌婦となっている」という氏の解釈には首肯できない。

(5) 岩見照代「お力伝説―『にぎりえ』論」(『樋口一葉を読みなおす』新・フェミニズム批評の会編 学藝書林 一九九四年六月)は、「血の連鎖は、消え去った〈現在〉として肉体的にも霊的にも受け伝えられ、絶えず再生され反復される。(略)それはまた、へにぎりえⅡ〈喪失〉のイメージの中に、絶えず見出され続ける無限の反復である。」とする。この反復という視点は小稿に通じるものと思われるが、部分的なものであり、「作品がはらむ〈空洞〉の中心にある〈お力〉という徴表シグナチャーを読んでみた

い」とし、「聖」なるものとしてのお力をとらえる氏の論とは、小稿は基本的な立場を異にしている。

(6) 岩見照代 (前掲論文)

(7) 木股知史「女とハンカチ」(『イメージ』の近代日本文学誌) 双文社出版 一九八八年五月

(8) 松坂俊夫 山田有策 蒲生芳郎「一葉文学の基層と展開」(『基督教文化研究所研究年報』第三号 一九九〇年三月) で山田氏は、「お力の形をなさない暗闇」を「フェミニズムの原像」とし、「自分の(略)とらえがたい内部世界をとらえようとしてみても結局はそこからもれてしまふ、いわば暗闇のようなもの、それを『にこりえ』という言葉で象徴的に表現している」と述べて、「お力が言葉を通じて自分の内面を語ろうとする」と「横町の闇での『独白』のように『支離滅裂』なものになっってしまうか、「この夜の身の上話のように〈制度〉の枠の中におさまったものになっってしまうかしかない」と指摘している。重要な指摘であるが、「お力の実存、その生の実相は、そういう言葉では」とらえきれず、「語れば語るほど、お力の内部の暗闇はかえって深くなる」ことを、お力が「知っていた、自覚していた」とする解釈には異論があり、小稿は、お力が何とか言葉にしようとして語った、米を溝にこぼした記憶を重視し、テクストの反復という構造と併せて論じたものである。

(9) 戸松泉氏 (前掲論文) にも、「自らの〈へ生〉」に閃む激しい心の振幅や、自己監視の視線やは、他の酌量には見られないお力固有のものであり、この点にお力の異質性は集約される。」という指摘がある。

(10) 金井景子「『女』の米歴——『にこりえ』論への視角」(『媒』第五号 一九八八年二月) は、「お力の『決意』は自らを言葉化して送り出すこととの恐れしかし自己の持てる表現の全てを尽くして言葉に賭けてみよとする点において一葉自身の思いと、まさにオーバー・ラップするので

ある。(略)何か特別な物語を期待する聞き手に、凍てつく濁り江に指のあいだからこぼれるように沈んで行く白米の記憶——無理解の中へ孤として歩き出さねばならぬ己れの生の核をなすイメージを語ること。お力はともかくもそこから始めようとしたのだ。」と指摘している。氏の論旨そのものは小稿とは異なるが、この指摘に関して言えば、小稿は氏の指摘を、さらに反復という視点を加えて敷衍させたものとなっているかもしれない。

(11) 拙稿「樋口一葉『たけくらべ』論」(『近代文学試論』第三号 一九九五年十二月)をもとに、補足して述べている。

本文引用には、筑摩書房版『樋口一葉全集』を用い、旧字体は新字体に改め、ルビは省いた。